

故良知力教授主要著作目録

一九五二年（昭和二十七年）

卒業論文「レッシング——彼の作品の一部に関する研究」（三月）

一九五四年（昭和二十九年）

「レッシングのヴォルフエンビュッテル時代」『一橋論叢』第三一卷第三号（三月）

一九五六年（昭和三十一年）

「レッシングのスピノーザ主義の社会的性格」『一橋論叢』第三六卷第四号（一〇月）

一九五七年（昭和三十二年）

資料紹介「ウールリッヒ・フォン・フッテンの対話集について」法政大学『経済志林』第二五卷第二号（四月）

一九五八年（昭和三十三年）

「フォイエルバッハのスピノーザ批判について」『一橋論叢』第三九卷第一号（一月）

「フォイエルバッハのヘーゲル批判によせて」『経済志林』第二六卷第三号（七月）

一九五九年（昭和三十四年）

書評「ウィルヘルム・ボルフ著『シュレージエンの十億』ほか」『一橋論叢』第四一卷第六号（六月）

『ドイツ初期社会主義における歴史構成の論理——ウィルヘルム・ワイトリングとモーゼス・ヘスをめぐって(一)』『経済志林』第二七卷第三号(七月)
翻訳 J・クチンスキー『戦後西ドイツの政治と経済』(共訳) 未来社(二〇月)

一九六〇年(昭和三五年)

『ドイツ初期社会主義における歴史構成の論理——ウィルヘルム・ワイトリングとモーゼス・ヘスをめぐって(二)』『経済志林』第二八卷第四号(二〇月)

一九六一年(昭和三十六年)

『大原社会問題研究所に所蔵されたラッサールの書簡』一橋大学経済研究所『経済研究』第二二卷第一号(一月)
研究ノート『大原社会問題研究所所蔵の源泉的諸資料について』『一橋論叢』第四五卷第二号(二月)

書評「W・スターク著、杉山忠平訳『経済学の思想的基礎』」『経済志林』第二九卷第二号(四月)

『初期マルクス解釈史についての覚書』『経済志林』第二九卷第四号(一〇月)
翻訳・解説 H・マルクーゼ『初期マルクス研究——「経済学Ⅱ哲学手稿」における疎外論』(共訳) 未来社(二一月)

一九六三年(昭和三八年)

『オーストリアにおけるカソリック左派の思想をめぐって』『経済志林』第三一卷第二号(四月)

『私の留学記・伝統にくすぶるウィーン大学』『東洋経済』別冊 春季号

『労働の歴史——棍棒からオートメーションへ』(共著) 法政大学出版局(六月)

一九六五年(昭和四〇年)

『初期マルクス発展史ノート(一)——主として東ドイツの同時代資料について』『経済志林』第三三卷第二号(五月)

一九六六年(昭和四一年)

『ドイツ社会思想史研究』未来社（五月）

翻訳『マルクス・エンゲルス全集第一七卷』（マルクス「社会民主労働党委員会へ」、「ブラウンシュヴァイク委員会メンバーの逮捕について」、「ドイツにおける出版と言論の自由」、「フォルクスシュタート」編集部へ）、「ネチャーエフによるインタナショナルの名称の詐称についての総評議会の声明」、「エンゲルス「ロシアにおける事態」、「ソンヴィリエ大会とインタナショナル」、マルクス・エンゲルス「社会民主労働党委員会への手紙」）大月書店（八月）

「バリ時代のマルクスにたいする監視記録——モスクワ・マルクス主義・レーニン主義研究所に保存されたプロイセン機密國家アルヒーフ」『土地制度史学』第三三号（一〇月）

資料紹介「Ernst Engelberg, Revolutionäre Politik und Rote Feldpost 1878-1890. Berlin 1959. xi, 291 S.」『経済志林』第三四卷第四号（一〇月）

一九六七年（昭和四二年）

「初期マルクス発展史ノート（二）——ブルーノ・バウアーの批判『無神論者ヘーゲル』を中心に」『経済志林』第三五卷第一号（一月）

資料紹介「Carl Heinzen, Marx-Charakteristik」『経済志林』第三五卷第二号（五月）

『資本論』第一巻の反響——ドイツ「経済学史学会編『資本論』の成立」岩波書店（一一月）

一九六八年（昭和四三年）

「マルクスと真正理論のテロリズム」『思想』第五二七号（五月）

翻訳・解説 H・マルクーゼ『改訳版』初期マルクス研究——「経済学Ⅱ哲学手稿」における疎外論（共訳）未来社（五月）

「東欧の新潮流」『未来』第二二号（六月）

「歴史における断絶の意識とユートピア——マルクーゼ小論」『三田新聞』七月二十四日号

「ポーランド・マルクス主義」『未来』第二五号（一〇月）

翻訳 R・ヘルボレン『西ドイツの独占資本——西欧市場への進出』（共訳）法政大学出版局（一〇月）

資料紹介「新たに刊行されるマルクス・エンゲルス全集の歴史的・批判的版（MEGA）について」『経済志林』第三六卷第

四号(十二月)

一九六九年(昭和四四年)

「ヘスは若きマルクスの座標軸たりうるか——廣松渉氏の初期マルクス論によせて」『思想』第五三九号(五月)

「ヘスの妻とマルクス」『未来』第三二二号(五月)

「私の古典」『未来』第三五号(八月)

「エルンスト・フィッシャーのなかの民主主義によせて」『未来』第三八号(十一月)

一九七〇年(昭和四五年)

「七〇年代へのいざない」『明治大学新聞』一月八日号

「偉大な否定性の弁証法——ヘーゲル生誕二〇〇年によせて」『図書新聞』一月二四日号

翻訳・解説 G・ルカッチ『美と弁証法——美学カテゴリーとしての特殊性について』(共訳) 法政大学出版局(三月)

「ドイツ中央アルヒーフ訪問」『日本読書新聞』三月九日号

「抽象的唯物論は抽象的唯心論であること——若きマルクスにおける構想力の論理」『未来』第四六号(七月)

翻訳・解説 J・クチンスキー『労働者階級の成立』平凡社(一〇月)

「尻切れトンボの話」『小平学報』第五九号(一〇月)

「マルクレーゼにおける弁証法的現象学の試み」『理想』第四五一号(十二月)

一九七一年(昭和四六年)

『初期マルクス試論——現代マルクス主義の検討とあわせて』未来社(三月)

「マルクスの学位論文の一節によせて」『一橋論叢』第六五巻第四号(四月)

「聖家族」『現代の理論』第八巻第五号(五月)

「追悼 ジョルジュ・ルカーチ」『日本読書新聞』六月二二日号

翻訳『マルクス・エンゲルス全集第二七巻』(「第二部」、「補録」、「文献目録」) 大月書店(六月)

対談「ハンガリーとルカーチ」(羽仁協子氏とともに)『未来』第六〇号(九月)

『マルクスと批判者群像』平凡社(一〇月)

「具体化とは何か」『未来』第六三号(十二月)

研究動向「ヴァイトリング研究・その基本文献」『季刊社会思想』第一卷第四号(十二月)

翻訳『マルクス・エンゲルス全集第二八卷』(第二部、書簡一—三二、「文献目録」)大月書店(二月)

一九七二年(昭和四七年)

「自戒」『ある軌跡』未来社二〇年の記録』未来社(四月)

翻訳 G・ルカーチ「人間の思惟および行動の存在論的基礎(上・下)」(共訳)『未来』第六九、七〇号(六、七月)

「日常性批判の基礎づけ」『ウニヴェルシタス』第一卷第二号(八月)

翻訳・解説 G・ルカーチ『モーゼス・ヘスと観念弁証法の諸問題』(共訳)未来社(一〇月)

「若きヘーゲル派」本田喜代治、江口朴郎、浜林正夫編『進歩と革命の思想・西洋編下』新日本出版社(十一月)

一九七三年(昭和四八年)

「すすめたい本」『小平学報』第六七号(四月)

書評『ユダヤ人問題』をめぐって——山中隆次著『初期マルクスの思想形成』『思想』第五八八号(六月)

「ドイツ歴史学の革命的伝統と新MEGA」『新しいメガ』極東書店(六月)

書評「哲学と鏡」船山信一訳『フォイエエルバッハ全集』によせて『図書新聞』九月一五日号

一九七四年(昭和四九年)

編集・翻訳・解説『資料ドイツ初期社会主義——義人同盟とヘーゲル左派』平凡社(四月)

「向う岸からの世界史——ヘーゲル左派とロシア」『思想』第六〇一号(七月)

一九七五年（昭和五〇年）

「赤マント ウィーン便り 一」『月刊百科』二月号

「革命版画 ウィーン便り 二」『月刊百科』三月号

「チロル雑記 一」『書斎の窓』三月号

「チロル雑記 二」『書斎の窓』四月号

「賤民支配」とは何か ウィーン便り 三『月刊百科』四月号

「ウィーンの革命と古本屋 一」『書斎の窓』五、六月号

「ウィーンの革命と古本屋 二」『書斎の窓』八月号

「一八四八年ウィーンの秋」『知の考古学』第四、五号（九、一〇月、一一、一二月）

一九七六年（昭和五一年）

「マルクス・エンゲルス著作集のモスクワ離れ」『日本読書新聞』一月二六日号

翻訳・解説 A・ヘラー『個人と共同体』（共訳）法政大学出版局（三月）

「ウィーン革命と労働者階級」加藤睦夫、古川哲、良知力、鶴見友好編『現代資本主義と国家』有斐閣（四月）

「すすめたい本」『小平学報』第七三号（四月）

「ウィーンと革命史」『図書新聞』六月一九日号

「四八年革命における歴史なき民によせて」『思想』第六二八号（一〇月）

「古典の価値」『書斎の窓』一一月号

翻訳・解説 G・マールクシュ『マルクス主義と人間学』（共訳）河出書房新社（一二月）

一九七七年（昭和五二年）

「脳裏に浮ぶ異様な心象」『生協のしおり』（四月）

「ブルードン主義者カール・グリューン」『現代思想』第五卷第八号（七月）

「ドイツ国立図書館へ寄贈の『大塚文庫』『如水会報』七月号

「ガスト・アルバイターとしての社会主義」『思想の科学』第七九号（八月）

一九七八年（昭和五三年）

「一八四八年にとってプロレタリアートとは何か」『思想』第六四五号（三月）

「朝あけ前後——大塚金之助とその短歌」『現代と思想』第三十一号（三月）

書評「ディーツゲン著、森田勉訳『一手工業者が明らかにした人間の頭脳活動の本質』」『日本読書新聞』三月六日号

「社会科学を学ぶにあたって」『ほんとびあ』四月一日号

「人生と読書」『緑の旗』第二二二号（四月）

『向う岸からの世界史——一つの四八年革命史論』未来社（二〇月）

「マルクスの遺稿の歴史的運命」『週刊読書人』一一月二七日号

一九七九年（昭和五四年）

「一八四八年ウィーン雜記」『日本読書新聞』四月二日号

「マルクス・エンゲルスにおける四八年革命論の基礎構造」良知力編『共同研究「一八四八年革命」』大月書店（五月）

「一八四八年・ウィーン・女」『創文』五、六、七月号

「マルクーゼ 人と思想」『朝日ジャーナル』八月三十一日号

書評「伝説をとおしてみた中世賤民像 阿部謹也著『ハーメルンの笛吹き男』」『月刊エディター・本と批評』九月号

「木曾山中を歩く」『朝日新聞』九月二三日号

書評「細見英著『経済学批判と弁証法』」『図書新聞』一〇月二〇日号

「貨幣の表情」『朝日新聞 夕刊』一一月六日号

一九八〇年（昭和五五年）

翻訳・解説 A・ヘラー『マルクス主義的価値論のための仮説』（共訳）法政大学出版局（二月）

「四八年革命期の女性史断章」『創文』五月号

解説『大塚金之助著作集』第七卷『社会思想の旅——』岩波書店（九月）

「大塚金之助著作集によせて」『図書新聞』七月二二日号

一九八一年（昭和五十六年）

「革命とマスコミ——一八四八年のウィーンをめぐる」『月刊エディター・本と批評』一月号

「『買春ツアー』に考える」『世界』第四二三号（二月）

「ウィーンでの入院」『月刊健康』二月号

「理念としての社会主義——荒畑寒村さんの生き方と思う」『読売新聞 夕刊』三月一九日号

「ウィーン文化の歴史的风土」『週刊朝日百科・世界の食べもの・オーストリア』七月二六日号

翻訳 K・マルクス『資本論草稿集①』一八五七—五八年の経済学草稿（「資本にかんする章」）大月書店（七月）

「一八四八年革命における地域と民衆」『地域と民衆——国家支配の問題をめぐる——歴史学研究 別冊特集』（二月）

一九八二年（昭和五十七年）

翻訳・解説 A・ヘラー『マルクスの欲求理論』（共訳）法政大学出版局（一月）

書評「構造的隘路はつきり J・スタニキス著、大淵人一訳『ポーランド社会の弁証法』」『読売新聞』一月二一日号

書評「植民地時代、都市庶民の変貌 角山栄、川北稔編『路地裏の大英帝国』」『読売新聞』二月一六日号

書評「都市の生活史あざやかに 清水廣一郎著『中世イタリア商人の世界』」『読売新聞』三月二二日号

「ウィーンの都ウィーン」『月刊健康』四月号

「革命史における言葉の虚像について」『思想』第六九五号（五月）

「一八四八年革命期における民衆像」ワイマル友の会『研究報告』第七号（五月）

「一九八一年の歴史学界——回顧と展望——ヨーロッパ・近代・一般」『史学雑誌』第九一編第五号（五月）

書評「憧憬の世界への橋渡し ケネス・ドーパー著、久保正彰訳『わたしたちのギリシア人』」『読売新聞』五月三日号

書評「寛容な理性へ敗北の経験 藤田省三著『精神史的考察』」『読売新聞』五月一七日号

書評「花咲く時代」の暮らし H・フレティヒヤ著、平尾浩三訳『中世への旅 騎士と城』『読売新聞』六月二一日号

書評「民衆の実態独自の筆致で 喜安朗著『バリの聖月曜日』」『読売新聞』六月二八日号

一九八三年（昭和五八年）

- 書評「西欧的知の基盤に光を 樺山紘一著『西洋学事始』」『読売新聞』八月二三日号
- 書評「生きた証言で最初の通史 ハワード・ジン著、猿谷要監修、富田虎男、平野孝、油井大三郎訳『民衆のアメリカ史上・中・下』」『読売新聞』九月一三日号
- 「女が銃をとるまで——一八四八年女性史断章」『社会史研究』第一号（一〇月）
- 「ドナウの水浴」『社会史研究』第一号（一〇月）
- 書評「いまなぜ社会史的中世像か 阿部謹也・網野善彦著『対談 中世の再発見』と雑誌『社会史研究』の創刊」『図書新聞』一〇月二日号
- 書評「憲法九条や知識人の考察 丸山真男著『後衛の位置から』」『読売新聞』一〇月四日号
- 書評「ロンドンの祝祭多角的に 海野弘著『都市とスベクタクル』」『読売新聞』一〇月一日号
- 書評「民族主義問題研究の好著 ハンス・コーン著、稲野強ほか訳『ハブスブルク帝国史入門』」『読売新聞』十一月一日号
- 書評「廣松渉・片岡啓治編・解説『マルクス主義革命論史 一 マルクス・エンゲルスの革命論』」『日本読書新聞』十一月二十九日号

「味読指定席」『朝日新聞 日曜版』一月三〇日号

- 書評「英国中心に初の本格派 星名定雄著『郵便の文化史』」『読売新聞』一月三十一日号
- 書評「一九世紀の仏農村の実態 M・セグレエ著、片岡幸彦監訳『妻と夫の社会史』」『読売新聞』二月一四日号
- 書評「ボリス共同体への歩み 安藤弘著『古代ギリシアの市民戦士』」『読売新聞』二月二日号
- 書評「北欧中世の実像に迫る 熊野聡著『北の農民ヴァイキング』」『読売新聞』三月七日号
- 書評「多民族国家の近代化の過程描く ハンス・コーン著、稲野強、小沢弘明、柴宜弘、南塚信吾訳『ハブスブルク帝国史入門』」『エコノミスト』三月二二日号
- 「若きマルクスと〈同時代〉」『週刊読書人』四月二五日号
- 「カニバリズム雑考」『社会史研究』第二号（五月）
- 書評「近代日本の女性史に光 鹿野政直著『戦前・「家」の思想』」『読売新聞』五月二三日号

『思想の言葉』『思想』第七〇八号(六月)

『ネコの家出』『月刊健康』六月号

書評「歴史に民衆の心性探る P・アリエス著、中内敏夫、森田伸子編訳『へ教育』の誕生」『読売新聞』六月六日号

書評「西欧社会の中の『有縁』阿部謹也著『中世の星の下で』」『読売新聞』八月十五日号

書評「史料研究で通説に挑戦 N・コーン著、山本通訳『魔女狩りの社会史』」『読売新聞』八月二十九日号

書評「歴史もまた夢」見事に実証 G・デュービー著、小佐井伸二訳『ロマネスク芸術の時代』『読売新聞』九月五日号

『日記から』『朝日新聞』夕刊 九月二二、二三、一四、一六、一七、一九、二〇、二二、二三、二四日号

書評「体制と民族の矛盾突く V・モンティユ著、森安達也訳『ソ連がイスラム化する日』」『読売新聞』九月二六日号

書評「大衆像の影を鮮明に描く A・ソプール著、井上幸治監訳『フランス革命と民衆』」『読売新聞』一〇月一七日号

『わだかまり』『法学教室』十一月号

『古代美術史』雑録』『社会史研究』第三号(十一月)

『革命史におけるピラと壁新聞』一橋大学社会科学古典資料センター『第三回西洋社会科学古典資料講習会』(十一月一八日)

書評「近代主義、粘り強く追及 今村仁司著『批判への意志』」『読売新聞』十一月二一日号

書評「犯罪と庶民の姿に光 網野善彦ほか著『中世の罪と罰』」『読売新聞』十二月一九日号

一九八四年(昭和五九年)

「民族問題・ナシヨナリズム」、「ユダヤ人と反セミティズム 三、近代」(この項は共同執筆) 西川正雄編『ドイツ史研究入門』東京大学出版会(一月)

「若きヴェルテルの喜び」『社会史研究』第四号(四月)

「武装せるプロレタリア——一八四八年ウィーン国民軍史によせて」『思想』第七一九号(五月)

「夢を追うこと」『新しい教師たちへ一六〇のメッセージ』ほるぷ出版

一九八五年(昭和六〇年)

書評「聖と俗の交錯浮き彫り C・ウォルフォード著、中村勝訳『市の社会史』」『読売新聞』一月七日号

- 書評「歴史に探る詩の主人公 E・ルロワリラデュリ著、杉山光信訳『ジャスミンの魔女』」『読売新聞』二月二五日号
「セドルニツキは女を殺したか——ウィーン・一八四八年 一」『月刊百科』四月号
書評「フランス史を新視角で P・ペロー著、大矢タカヤス訳『衣服のアルケオロジ』」『読売新聞』四月八日号
書評「社会史めざす苦闘の跡 阿部謹也著『歴史と叙述』」『読売新聞』四月二二日号
「春と猫塚」『未来』二二四号（五月）
「猫に飼われて」『未来』二二五号（六月）
「因業おやじハウスマイスターの受難——ウィーン・一八四八年 二」『月刊百科』六月号
書評「民衆の生活描いて生彩 K・ハドソン著、北川信也訳『質屋の世界』」『読売新聞』六月二七日号
書評「芝居仕立てで描く歴史 渡辺金一著『コンスタンティノープル千年』」『読売新聞』七月一五日号
「コーヒー・ハウスとウィーン氣質——ウィーン・一八四八年 三」『月刊百科』八月号
書評「宗教改革期の生の証言 トマス・ブラッター著、阿部謹也訳『放浪学生ブラッターの手記』」『読売新聞』八月二六日号
「真夜中の音楽会——ウィーン・一八四八年 四」『月刊百科』一〇月号
『青きドナウの乱痴氣——ウィーン一八四八年』平凡社（一一月）

一九八六年（昭和六一年）

- 「一八四八年の社会史——ウィーンをめぐる」『影書房』（二月）
『魂の現象学——社会思想家として』平凡社（三月）
『女が銃をとるまで』日本エディタースクール出版部（九月）
編集・監訳『ヘーゲル左派論叢』第三卷（共同編集）御茶の水書房（九月）
翻訳「ハンガリーの破局——コシュートの政治的遺書」『社会史研究』第七号（一一月）
一九八七年（昭和六二年）
『ヘーゲル左派と初期マルクス』岩波書店（春季刊行予定）